

ぼうつと生きて来られた人生

志村 良知

三十年ほど早く生まれていたら農家の三男の私は徴兵検査甲種合格、現役兵で出征、戦死していた。十年前だったら戦争も飢えも経験し記憶に残った。

戦争が終わって僕らは生まれた。親の苦勞も飢えの記憶もなく僕らは育った。

物心ついたころ、世の中活気に満ちていた。後に団塊の世代と呼ばれるように、同年代の子供がどこにでもいくらでもいていつでも徒党を組めた。

高度成長時代に突入、我が家にも電化製品が徐々に入ってきた。中学一年のある日、庭に軽三輪トラック（ミゼット）が鎮座していた。これは絶好の玩具になって桑畑の中の野良道を走り回った。免許は三年後に十六歳で取った。

東京オリンピックの時は高校生、各国の女子水泳選手たちが夢にも出てきた。

大学は相当騒がしかったが、ノンポリに徹していれば授業にもサークルにも大きな影響は無かった。何より授業料は月千円と事実上タダ、

親と長兄の支援で何とかだった。

卒業時の景気は悪くなく、東証上場の製造業に入れた。オイルショック後、インフレ気味に名目給料は上がっていき、家庭を持って住宅ローンも簡単に組めた。

時代はバブルへ。新規事業、新製品、増産と中堅エンジニアは夜も日もなくこき使われていて、栄華に耽る夜の巷は享受できなかったものの実質収入は膨らみ、住宅ローンの早期返済の傍ら格好良いスポーツカーを乗り回せた。海外出張が多く、何回か海外観光にも出かけた。ヨーロッパ駐在でBMWにも乗った。土壇場では日米経済危機などあったが、退職金は満額頂け、まだ健全と言える制度のもの年金生活に雪崩れ込めた。ある団体に入会して素晴らしい知己を得、大学で教えるという経験もできた。

新型コロナ禍でも収入は安定。朝夕にベランダから富士山を眺める蟄居生活、退屈で死なない程度の諦観と知恵は身につけている。ワクチンも真つ先に打ってもらえた。

生まれた時代のちよつとの差で、農家の三男坊が時代に流されながらぼうつと生きて来られてごめん。